

受験 番号	
----------	--

二〇一〇年度
入学試験
国語問題

注意 答えはすべて解答用紙に書きなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

わたしは、ガラスの小びんをもっている。
とても重い。いや、びんそのものが重いということではない。重いのは、びんのもつ意味である。

びんは、直径五センチ、高さ八センチ、スクリュー式の金属のふたが付いている。どこにでもある、だれでもが見たことのある、(1)、ビタミンの錠剤が入っているような、ただのガラスびんである。

こんなものは、ごみ捨て場に行けば山ほどある。拾って帰って宝物にしようなどと思う子供は、まずいないだろう。

(2)、わたしは、小学校六年生のある日から、体の一部分のようにしてもっている。捨てようとしたことも、わざと忘れたふりをして、どこかに置いて帰ろうとしたこともあったが、^①ケツキヨクは、また大あわてで取りもどしに行っている。

ガラスの小びんは空っぽである。^①この空っぽが、わたしにいろんなことを語りかける。わたしは、このガラスの小びんを、何かでいっぱいになければならぬのだ。

ガラスの小びんは、そもそも父のものであった。そのときには、今のよう空っぽではなく、黒くしめつた感じの土が入っていた。

「これは甲子園の土だ。球場を去るとき、ホーム・ベースの所にしゃがみこんで泣きながらかき集めた土で、どこにでもあるというものではない。あの暑い夏の日、全力をふりしぼって戦った満足感と、ほこらしさと、くやしさを証言してくれるのが、このびんの中の土なのだ。」

父は、高校野球の選手として甲子園に出場したことが、何よりも自慢であった。

などと話し始めるのが、^③わたしははずかしかった。

わたしは、父のことはもちろん好きであったが、ときどき、そうでないこともあった。その大きな理由が、ガラスの小びんに入った土であったように思える。強そうに見えるのも、いばって感じられるのも、すべてあれがあるからだと思えるようになった。

事実、父には、そう思えるところもあった。自信とほこりがじゃまをするのか、社会とあまりうまくいっていないようなところがあり、子供のわたしが知るだけでも、仕事を三回もかわっていた。

母は、何を考えていたのだろう。父に向かって、^④あからさまに、甲子園の土の悪口をいうことはなかったが、祖母が来たとき、

^④「あれを、ばつと捨ててくれたら、いいのですけどね。」
と笑いながらだが、そう言っていたことがある。心の中では、わたしと同じことを思っていたのかもしれない。

小学校六年生のとき、わたしは、ひどく父からしかられたことがあって、甲子園の土を捨てた。たぶん、しかられた理由は、わたしのココロが^⑤まがまがまあいとか、真剣味が足りないとか、そうだったことであつたと思うが、わたしの父への小さな反発が一気に爆発して、ガラスの小びんを持ち出すと、中の土を、^⑥それごとばつと捨てた。

どんなに値打ちがあり、どんなにありがたい土でも、庭の土に混じってしまうと、すばらしさを証明することはできなくなり、わたしは、空っぽのびんを手にしたまま、笑いだしたい気持ちになっていた。それでも、父がえらそうに見えなくなると思うと、心が晴れ晴れとしてくるのだつた。

しかし、それから大変だつた。いい気持ちになつたのは、ほんの一瞬のこととで、とんでもないことをしてしまったという後悔がおそつてきて、わたしは、庭の土の中から、甲子園の土をより分けようと必死になつたが、むだな作業だつた。

試合の勝ち負けや、^②セイセキをほこることはあまりしなかったが、このガラスの小びんに入った土を大切にしている様子を見ると、^aそれがよく分かつた。
ガラスの小びんには、赤い文字で、「甲子園の土」と書いてあり、その下に小さく黒で、年月日と対戦相手校の名前が記してあつた。

子供のわたしから見ると、それはただの黒っぽい土であつたが、父の目には、^②に見えるようであつた。

ガラスの小びんを手のひらにのせ、あるいは、それを太陽にかざして、土の存在を確かめたりしている姿をよく見かけた。(3)、それは、甲子園の土に語りかけ、また、甲子園の土の言葉に耳をすましていたのであろう。しほんでしまった気持ちが力強くふくらんでくるように、たいていときは、それで父は元気になった。

父は、甲子園の土の^③キキ目は絶対で、自分ばかりか他人をも幸福にさせたり、自信を生まれさせたりできると信じているようであつた。

だから、わたしが、今日は試験があると言つたりすると、びんのふたを開け、おしそうな顔で、甲子園の土をほんのひとつまみ取ると、ばつばつとわたしの頭やかたにふりかけたりした。

そんなときは、いかにも大切なものを分けあたえるという感じで、^b恩着せがましく、わたしは正直、なんだ、ただの土じゃないかと、心の中では小さく反発していた。

父は、高校野球の選手として甲子園には出場したが、野球選手にはならず、会社員になつた。(4)、よけいに甲子園の土が大切だつたのかもしれない。

来客があつて、父の甲子園出場の^④ケイレキを知っている人ならいいが、そうでないときには、わざわざガラスの小びんを持ち出し、文字の部分を指でかくしながら、

「ところで、これは何だと思ひます。」

父がどんなにおこるだろう、ということが気になつた。そして、父の心——ほこりや、自信や、かがやかしい思い出まで捨ててしまつたと思つたと、大変な罪をおかしてしまつたような気にさへなつた。

^⑤わたしは、庭土の混じつた土をびんにつめ、そして、また捨て、ここにつまんでいたものはなんだつたのだろうかと思ふえた。

その日の夜、父は、^⑥イガイなこと、わたしをおこらなかつた。

「そうか。捨ててしまつたのか。」
とだけ言い、^⑥なぜか明るい顔をしていた。

わたしは、ごめんなさいと言い、空っぽのガラスの小びんをおしやると、父は、赤い文字で「甲子園の土」と書いたラベルをつめではがし、わたしに返してきた。「おこらない。その代わり、おまえがこれに何かをつめるんだ。お父さんの甲子園の土に代わるものをつめてみせてくれ。」

それから、もう何年もたつ。しかし、ガラスの小びんはまだ空っぽのままである。まだなのかと、父の声が聞こえる気がする。

わたしがほこりとともにこれにつめるものは、月の石なのか、南極のこけなのか、それとも、わたしのあせのしずくなのか、まだ決められない。

(阿久 悠「ガラスの小びん」)

問一 線①～⑥のかたかなを漢字に直しなさい。

問二 (1) (2) (3) (4) に入ることはとして最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア だから イ しょせん ウ たぶん エ それなのに
オ さもなければ カ たとえば

問三 線 a 「それ」の指す内容を答えなさい。

問四 線 b 「恩着せがましく」、c 「あからさまに」の使い方の例として適切なものを、次のア、イからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

b 恩着せがまし

ア 長い間目をかけてきたのに、恩着せがましく裏切られた。

イ せっかくの善意も、恩着せがましくほどこされると鼻につく。

ウ 社長になったとたん恩着せがましくふんぞり返って、みっともない。

エ 先生をクラス会にお招きし、皆で恩着せがましくごあいさつした。

c あからさまに

ア 間違いを指摘され、はずかしくて顔があからさまになった。

イ 最近気持ちがほぐれてきたようで、表情があからさまになってきた。

ウ 歯に衣着せぬ言い方であからさまに問題点を指摘した。

エ 見通しの悪い四つ角であからさまに飛び出した子供が事故にあった。

問五 線 d 「それこそ」のここでの意味として最も適切なものを次の中から

選び、記号で答えなさい。

ア まさしく母の言葉通りのように

イ いさぎよく思い切って

ウ 爆発という言葉通りに

エ 父の偉さを否定するかのよう

問六 線 (1) 「この空っぽが、わたしにいろんなことを語りかける」とありま

すが、「いろんなこと」とはどのような内容だと考えられますか。文章全体を読んで二つ答えなさい。

問七 線 (2) に入ることはとして最も適切なものを次の中

ら選び、記号で答えなさい。

ア 自分を客観的に映し出す鏡であり、自己嫌悪におちこむ落とし穴

イ 自信を呼び起こしてくれる光であり、ほこりを証明してくれる神様

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人類は長い長い時間をかけ、思索と瞑想と修行を重ねながら、宗教をつくりあげてきた。では、なにをもとめ、なにをさぐりあてようとして、さまざまな宗教をかんがえだしたのだろう。宗教の目的、その役わりは、どういうところにあるのだろう。

一人ひとりの希望としては、だれだつてゆたかにみちたりた真実の生活をもとめている。心のやすらぎをもとめている。それを幸福といつてもまちがいないだろう。

しかし、自分が幸福であるためには、自分だけでなく、あなたも幸福でなければならぬ。

あなたが幸福であるためには、あなたのまわりの人々、全世界の人々が幸福でなければならぬ。全世界の人々が幸福であるためには、地球上のすべての生き物が幸福でなければならぬ。象や牛やラクダや、鳥や魚などの生き物が、すべて幸福でなければならぬ。いや、生き物だけではなく、自然のすべて、天も地も、山も川も、雲も波も、それぞれがみちたりて生きる自分のすがたをよしとして、光りかがやいていなければならない。風が、天と地の喜びを伝えなければならない。

山と川のすがたは自然のころである。草、木、虫、魚のすがたも自然のころのあらわれである。野生の生き物たちのすがたも同じである。

自然のころが人間のころによびかけ、人間のころが自然のころにこたえる。人間と自然が A する、よべばこたえる。そこから充実した幸福な世界がひらけてくる。

だから、自然のよび声をよくきき、そこでながおこっているか知るだけでなく、こちらからも自然に問いかけ、自然と語りあいながら、ゆたかさがみちみち

ウ 過去とつながる通路であり、未来を占う魔法の道具

エ 屈辱の過去を思い出させてしまう証拠品

問八 線 (3) 「わたしははずかしかった」とありますが、それはなぜですか。説明しなさい。

説明しなさい。

問九 線 (4) 「あれを、ぱつと捨ててくれたら、いいですけどね。……」

わたしと同じことを思っていたのかもしれない」とありますが、わたしと母が思っていた「同じこと」とはどのようなことですか。説明しなさい。

問十 線 (5) 「わたしは、庭士の混じった土をびんにつめ、そして、また捨て、ここにまつていたものはなんだったのだろうか」とありますが、

この時の「わたし」の説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア どんなふうにも土を入れても、どうしても元のよう感じにならない

イ 甲子園の土が本場に特別な成分の土だったのだから、自分のこれまでの態度もあわせて申し訳ない思いでいっぱいになった。

ウ 土をつめ直したことは父でさえ気づくはずがないと思われたが、

罪の意識におそれ、父に正直にあやまろうと決意したものの、父の怒りを想像するとこわくてしかたなかった。

エ 甲子園の土が庭土と区別できない土に過ぎないことを改めて目の当たりにし、しかしそれが父にとつてはかけがえのないものなのだと思つと、理屈を超えた人のほこりの尊さや重さに胸を打たれた。

イ 小びんには父のほこりや自信やかがやかしい思い出がつまっていたはずなのに、捨ててしまつと何も残らず、人の心のはかなさや人生

のむなしさを思い知り、深いさびしさにおそわれた。

問十一 線 (6) 「なぜか明るい顔をしていた」とありますが、この場面の父の

態度から、父がどのようなことを思っていると考えられますか。答えな

さい。

た、うつくしい地球、うつくしい宇宙をつくりあげるように努力しなければいけない。それにはまず、自分のころのなかにそういう世界、そういう宇宙のイメージをえがいてみなければいけない。

ころのなかに宇宙の絵、世界の絵を、くりかえしくりかえし、えがく。それから自分のからだをはたらかせて、じつさいの作業にとりかかる。地球をほんとうの地球にするための仕事である。それがいつ完成するかは、やってみなければわからない。

やさしい仕事ではないが、やりがいのある楽しい仕事である。

宇宙をえがき、地球のすがたをえがくといつても、どういうふうにしたらよいのだろうか。

つみ木のブロックをつみあげるようにして、宇宙のモデルをつくることもできる。ジグソーパズルのピースをはめこむようにして宇宙の図柄を完成することもできる。新しいくふうをこらせば、いずれもおもしろいころみである。

しかし、けつきよくのころ、これらの方法は、人工の部品をつみあげる部品をよせあつめ、はりあわせることによつて全体のすがたをえがこうとしているのだ。部分から出発して全体をめざしているのだ。

ところが人間の生活は、深山のなかの孤立した村や大洋のなかの孤島にいたのではないのだ。だから、われわれのかんがえ方としては、いつも、部分と全体の両方からかんがえなくてはいけない。人間から自然をかんがえ、同時に自然から人間をかんがえることが必要なのだ。

こうなつてくると、もつとも単純な方法で、絵の具とふでで宇宙と世界の図をえがくのがいよいよということになる。さあ、パレットに絵の具をしばらくだし、ふでにその色をふくませて絵をかいてみよう。

うつくしい宇宙をえがく。もののみちみちた地球をえがく。ていねいに、じつとあいてを見つめてから愛をこめてえがく。そのえがき方、えがく前のものの見

方について、われわれはこれまでのいろいろな勉強をしてきた。

宗教というのは、特別にむずかしいことではない。宇宙の万物の見方なのである。いや、見方というよりも **B** 方。それがそうであるように、あるがまに見える目をつくりあげることなのである。目についたゴミをとって、すみきった目を回復するといつてもよい。それが宗教の出発点だったのである。

一本の木について、これまで学んだことをおもいだしてみよう。いろいろの見方があった。ゆつくり見る。じつと見つめる。まわりをまわって見る。外からだけでなく内部から見ると。その木になったつもりで見ると。しかし、見る時間が長ければよいというものでもない。チラッと見る。一瞬に見きわめる。本質を直観することもだいたいである。

本質を直観するということは、

C

日の光をあびた昼の木があるかとおもうと、夜の闇のなかにしずまりかえった木がある。夏の木があるかとおもうと、冬の木がある。緑あふれるような木があるとともに、かれて、枝ばかりになった木がある。人間についても同じことである。子どももいればおとなもいる。若者もいれば老人もいる。健康な人もいれば病気の人もいる。木も人間も、じつにさまざまな顔を持っている。まずその全体を見わたしてから、いま、目の前にたつて木をえがくのである。

葉、枝、ミギのそれぞれとともに、木の全体のかたちをとらえる。だから、とうぜん、根も見なければいけない。ふつう、根は見えないけれども、土のなかの根をおもいやつて、それがそうあるにちがいないそのすがたを想像してかくのである。

この本のはじめにのべたように、石にだつて石のへてきた時間があり、石のおかれている場所があり、石をとりまく空気がある。

木だつて同じことである。木の歴史があり、木のそだつた環境があり、その木がめぐりあつた経験がある。まっすぐたつた木もあれば、まがった木もある。木のかたちはそれらの時間をあらわしているのだ。

それに、木はたつた一本で生きているわけではない。林をつくり、森をつくつて、他の生き物と共存しているのだ。一本の木について見ても同じことである。

異種の植物と共生し、鳥やトカゲやリスと共生し、シカやワニと共生しているのだ。そしてもちろん、人間とも共存している。大樹のかけがえのない **③** 熱帯の人々にいこの場をつくっている。菩提樹のまわりに石がきをつくり、その石の上で村人たちがコマまわしを楽しむ。ときには、その木の下に修行者がすわって、瞑想にふけり、人類のゆくえをかんがえることだつてあるだろう。

そういうふうには、木と人間とのかわりあいとはとても深い。その深さをつつむ全体が、木のかたちのなかにあらわれているのだ。われわれは、そういう、木が語りかけるいのちのことは読みとって、絵としてえがくのだ。もちろん、木の種類によって、木のかたちによって、人間に語りかけることはちがう。われわれはさまざまな木の話の聞かなければならぬ。いや、なんとかしてそれが聞きたいのだ。

木は一つの宇宙なのである。木をえがくことは一つの宇宙をえがくことである。宗教という特別なことのようにかんがえやすい。しかし、そうではない。絵をかくことと同じなのであつた。

注

※1 思索……すじ道を立てて、考えをめぐらすこと。

※2 瞑想……目をとじて、静かに思いをめぐらすこと。

(岩田 慶治「からだ・こころ・たましい」より)

問一 線①③のかたかなを漢字に直し、漢字についてはその読みを答えなさい。

問二 **A** に入ることはとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

うにあらわしている、そのいのちの全体を見ることである

問十 線⑤「木と人間とのかわりあいとはとても深い」とありますが、木と人間とのかわりあいを具体的に説明している部分の初めと終わりの五字を答えなさい。(句読点も数えます)

問十一 次のアオについて、本文の内容にあてはまるものには○、そうでないものには×をそれぞれ答えなさい。

ア 自然のこころをよく理解し、自分からは何もせずただ自然の声に従って生きることにより、みんなが幸福になることができる。

イ 私たちが幸福になるために、うつくしい地球・宇宙の実現に向かって努力し続けることが宗教というものである。

ウ 自然を傷つけないで大切にすることによって、地球を大昔のような美しいすがたにもどすことが今一番大切なことだ。

エ 木の全体をえがくのと同じようにして、私たちは自分の中に一つの宇宙のイメージを自分の手でえがくことが大切である。

オ 人間が作り、そして失ってしまった宗教をもう一度この手にとりもどすために、私たちはまず一本の木をえがなくてはならない。

B

方。それがそうであるように、ある

④

目についたゴミをとって、す

みきった目を回復するといつてもよい。それが宗教の出発点だったのである。

一本の木について、これまで学んだことをおもいだしてみよう。

いろいろの見方があった。ゆつくり見る。じつと見つめる。まわりをまわって見る。外からだけでなく内部から見ると。その木になったつもりで見ると。しかし、見る時間が長ければよいというものでもない。チラッと見る。一瞬に見きわめる。本質を直観することもだいたいである。

本質を直観するということは、

C

日の光をあびた昼の木があるかとおもうと、夜の闇のなかにしずまりかえった木がある。夏の木があるかとおもうと、冬の木がある。緑あふれるような木があるとともに、かれて、枝ばかりになった木がある。人間についても同じことである。子どももいればおとなもいる。若者もいれば老人もいる。健康な人もいれば病気の人もいる。木も人間も、じつにさまざまな顔を持っている。まずその全体を見わたしてから、いま、目の前にたつて木をえがくのである。

葉、枝、ミギのそれぞれとともに、木の全体のかたちをとらえる。だから、とうぜん、根も見なければいけない。ふつう、根は見えないけれども、土のなかの根をおもいやつて、それがそうあるにちがいないそのすがたを想像してかくのである。

この本のはじめにのべたように、石にだつて石のへてきた時間があり、石のおかれている場所があり、石をとりまく空気がある。

木だつて同じことである。木の歴史があり、木のそだつた環境があり、その木がめぐりあつた経験がある。まっすぐたつた木もあれば、まがった木もある。木のかたちはそれらの時間をあらわしているのだ。

ア 対面 イ 共感 ウ 対応 エ 呼応

問三 線①「ゆたかさがみちみちた、うつくしい地球、うつくしい宇宙」を別の言い方で表現している部分を、これより前の文章から十字以内でぬき出しなさい。

問四 線②「じつさいの作業」とありますが、それは具体的にどうすることですか。筆者が一番良いと考えている方法を二十五字以内で答えなさい。

問五 線③「部品をよせあつめ」とありますが、筆者は「部品」を具体的にどのようにたとえていますか。そのたとえを二つ、文中からぬき出しなさい。

問六 線④「人間」、⑤「自然」とありますが、人間——自然

と同じ組み合わせのものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 宇宙——世界 イ 村——島
ウ 部分——全体 エ 人工——部品

問七 **B** に入ることはを考えると、二字で答えなさい。

問八 線④「目についたゴミ」とありますが、それは何をたとえていますか。自分のことばで答えなさい。

問九 **C** に入ることはとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 長く見続けて見慣れてしまうのではなくて、一瞬だけ見ることによ

って余計なことを考えずに木を見ることである

イ 木についての知識をもとにして木を理解するのではなくて、見た瞬間の印象のまま木を見ることである

ウ 人間の目で外から木を見るのではなくて、木になったつもりになり、木のこころの目で見ることである

エ 部分のよせあつめとしての全体ではなくて、いのちがそれをそのよ

